

自由22

サルにおける刺激等価性成立の検討。

張替英明（立命館大・文）

条件性見本合わせ課題（ $A \rightarrow B$ ）を訓練することによって見本刺激と比較刺激が対称的等価関係を形成する（ $B \rightarrow A$ が成立すればその証明になる）ためにはどのような変数の操作が必要かをヤクシマニホンザル2頭を被験体として調べた。

刺激には青、緑、黄、赤の計4種の色刺激を用い、訓練期の刺激の条件関係は青 $\rightarrow$ 黄、緑 $\rightarrow$ 赤であった（CRTディスプレイによる刺激提示、タッチパネルによる反応検出）。通常の見本合わせ課題と異なる点は、見本・比較刺激の提示位置が試行毎に変化すること（7つあるキのうち3つに提示）、さらに比較刺激（赤と黄）が先行して提示され、見本刺激（青または緑）が後続して提示される点であった。この提示順序で同時見本合わせ、遅延見本合わせを訓練し、それぞれ全強化プロープによる対称性のテスト（黄 $\rightarrow$ 青、赤 $\rightarrow$ 緑）を行った。

その結果、1頭のサルは同時見本合わせのテストにおいて有意に高い正答率を示した。見本刺激が先行して提示される課題も訓練、テストしたが、同様の結果が得られた。

これらの結果は、同時見本合わせ場面では対称性の成立が促進されることを示唆するものであるが、その行動は時間軸上で同時に提示される見本刺激と正比較刺激が構成する複合刺激の統制下にあったとも考えらる。

自由23

ヤクザルのクー・コールにおける地理的変異

田中俊明（日本大・文学・心理）

これまでの研究で、ニホンザルの発するクー・コールには地域差が存在することが示唆された。屋久島集団と大平山集団の様々な年齢の個体のクー・コールを収集・分析して比較したところ、基本周波数の高さは、ほとんどの年齢層で、大平山集団の方が屋久島集団よりも低い周波数域に分布していることが分かった。

平成5年以来、それぞれの集団に固有のクー・コールの発達過程を解明するために、大平山と屋久島で幼体の追跡調査を行ってきた。本年度は、大平山の幼体11頭（平成7年4月）と屋久島の幼体7頭（平成7年10-11月）のクー・コールを録音した。結果は、現在分析途中ではあるが、どちらの集団の追跡個体も、0歳、1歳、2歳と年齢を重ねてゆくうちに、クー・コールの基本周波数の高さは、低くなってゆく傾向がみられた。一方、各集団の追跡個体群の基本周波数の高さの分布は異なり、大平山の個体群の方が、屋久島集団の個体群よりも低い周波数域に分布していることが示唆された。これまでの断続的な個体のデータに基づく集団比較の結果と同様の傾向が、今回の継続的な個体のデータに基づく集団比較においても得られたことは、ニホンザルにおける地域差の存在の可能性をより高めると考えられる。

今後、これまで得られたデータの詳細な分析を行う。また、来年度以降も、幼体の追跡調査を行いあわせて分析する予定である。